

「朽ちないものを求める人生」

I ペテロ 1:3~9

チャップリンが全盛期の頃、モンテカルロでチャップリンコンテストがあり、チャップリン本人が名乗らずに出てみたところ、3位入賞でした。人は物事の本質を見抜くことができないものです。今年のテーマに「大観を見極める」を掲げています。私たちはクリスチャンとしてどう決断し、判断するのか、そしてそれは、自らのためではなく、私たちに与えられている大切な使命のために判断しなければいけません。パスカルが「人は考える葦である」といったように、考える人が群生することで倒れないものになります。本物を見極めて、且つ、目線を合わせて正しく進んでいきたいと思えます。

■ 過ぎ越しの祭り

今日聖餐式を行います。これがどういうことを学んでいきましょう。旧約聖書の時代、過ぎ越しが始まったのは、イスラエルの民がエジプトで奴隷になっていた時のことです。過ぎ越しとは、親鳥が雛を羽で覆うように守るという意味があります。まず、エジプトの歴史を思い返してみましよう。ヨセフは12人の兄弟の中から、エジプトの役人の家に奴隷として売られていきました。しかし、偽りの告発から犯していない罪のために投獄されました。投獄されている中で、エジプトの王ファラオが夢をみて、その夢を正しく解き明かすことによってヨセフは大臣になりました。ヨセフもダニエルも、しもべとしての時間を過ごし、屈辱を受けました。ダビデは30年間も荒野で苦しみ、またモーセは80歳まで荒野にいたと書かれています。モーセは、3歳の時に売られて川に流されてから苦しみと試練の中で、300万人の自分の同胞を助けるリーダーとなるための訓練を80歳まで受けたのです。

■ 黒い羊効果の絵から

たくさん白い羊の中に1匹だけ黒い羊がいる絵を見ていただきました。黒い羊の心理学というのは、本当は同じ仲間なのに、誰かの事を自分より見下したとき、外の黒い羊よりも中の黒い羊を排除するという人間の心理です。10人いれば一人を悪くすることで9人がまとまるということが起こります。人は、考え方に違いを感じる、その人とうまくいかないと考えます。クリスチャンは特にその組織に入ると、自分の在り方を考えようとしたり、正しいことをしたいと思ったりします。そこでその中で活動しようとする、9対1の配分の中の1になることが多いのです。聖書は、その1になれと言っているわけではなく、1になってもその中で愛される必要があると示しています。みんなに愛されるかと思ったらそうではなくて、心に血を塗っているかということです。出エジプトの時代は自分が犯した罪に対して命をもって償うという意味で生贖を捧げました。今はそういうことはしません。なぜなら一人の人が亡くなることで完成したと記されているからです。当時の人は罪を犯したら、死をもって償わなければいけないことを、ほかのものの命を代償にすることで生きていました。私たちは、自らを生かすために命を犠牲にしています。また、生きる細胞だけでなく、私たちが生きようとする、必ず他者を否定します。間違った一致感を保って生きようとしているのです。そこでイエス様は、十字架に掛かる道を進んで行かれたのです。その原点は、モーセがイスラエルの民を救出するように神に言われてファラオのもとに行ったことにあります。最初は歓迎を受けますが、その憎しみは羊の心理のごとくファラオはモーセを敵視します。これはなぜかと言うと、自分が持っているものに執着していたからです。そこで10の災いが起きるたびに心を頑なに執着していたものを失いたくないという思いから欲にかられて、とうとう10の災いまで進んでいきます。10の災いとは、初子(長男)がみんな死んでしまうという災いです。彼はそのことを分かっていたが、そんなことは起こるわけがないと思っていました。ところが、実際にそれが起こります。神はモーセが率いるイスラエルの民に、門の鴨居に罪のない羊の血を塗らなさいと言ったのです。それが過ぎ越しの祭りです。門の鴨居に血を塗ると、死の霊はそこを去っていったとエジプト記に記されています。イスラエルの民は、過ぎ越しの祭りから始まり、荒野の40年間仮庵の祭りまで祝いつけて、子々孫々に伝承していきました。自分たちがどんな生き方をして、先祖がどんなふうか今の恵みを得たのかを子ども達に教えるという儀式のために祭りを伝承しました。そんな中で段々目的がずれていき、心を伝える為ではなく、儀式が重視されるようになったのが、「最後の晩餐」の頃だったというわけです。イエス様も弟子たちと晩餐をし、弟子たちに「今日でこの過ぎ越しは、私が再び来るまで飲み食いすることはない。」と言います。イエス様は弟子たちに血とパンを配り、いつまでもこれを覚えていなさいと伝えます。クリスチャンは今まで生きてきた中でどれだけの罪があるかを知ろうとする人々です。それが礼拝です。罪深い自分だけ

れども、その血によって犠牲を払われ、許されたということを知っているからここに集うのです。間違っていた自分が、犠牲の上に生きていることを理解するということが大切です。そして、罪にさいなまれて落ち込むのではなく、恵みと平安に満たされますようにと書かれています。

■ 試練は「純粋さ」～第1ペテロ7節

私達の人生で、闇は悪だと思っています。しかし、闇は神が創造された最高傑作です。人生は苦難があって闇があります。試練とは試して精練するということですが、聖書では「純粋さ」と訳しています。試練は純粋になる為なのです。清められていく姿です。朽ちるものにあなたの目線が向かって行っていないかをぜひもう一度考えてください。

■ 執着は朽ちることに目を向ける

自らの命を心配し自らの財産に目を向けたファラオは、大切なものを失ってもそこに気付かませんでした。息子を失ったファラオは、モーセを追って二つに割れた海に入っていく、多くの兵士の命を奪いました。誰かのためにしてあげる良い行為も、自分の存在意義の為であるなら執着です。正しいものを求めようとしても、一部罪が私たちの心にはびこります。だから過ぎ越しの祭りで最初に7日間種のないパンの祭りがあるのです。自分の生涯の中で本当に罪の根がないかを見極めなさいという意味なのです。

■ あなたの目線は今どこにありますか

今年神様の前で純粋な人でありたいと願います。あなたの目線は、朽ちない天に携えられているでしょうか。どこに宝を蓄えようとしていますか。あなたの心に過ぎ越しの区別をしていますか。もう一度罪を覆ってもらう必要があります。そのためには自らが罪を犯したことを知らなければいけません。当時、過ぎ越しの祭りの時期になると人々が集まってきて犠牲を捧げました。そこは血の海になったと言われていました。皆さんも自分の心に過ぎ越しの血を塗ってほしいと思います。しかし、神様は罪を責めるために塗れと言っているのではありません。私が犠牲になるからもう罪を繰り返さないようにと言われているのです。イエス様も、あなたの代わりにも悔い改めることを通して、十字架で彼らの罪を許してくださいと祈りました。そして、私が背負うからあなたはもう生贖を捧げなくてよい、だからもう罪を犯さないようにしなさいと、命がけの愛を表していました。

■ 憎しみという執着

アメリカにアーミッシュという集団がありますが、2006年そのなかで事件が起きます。アーミッシュの子どもが8割を占めていた学校に、銃を持った男性が押し入り、先生、子どもを合わせて5人が殺され、その直後、犯人も自らで命を絶つてしまうという悲惨な事件です。しかしその後の目撃証言でいろんな事がわかったそうです。まず犯人が銃を持って入ってきたとき、年長者だった女の子がみんなの前に立ち彼らを守ろうとしました。しかし犯人は躊躇なく彼女を打ち殺しました。そんななか、彼女の妹が同じ様に立ち上がり、みんなを守ろうとして打ち殺されてしまったのです。事件後、彼女達の祖父がアーミッシュのみんなに語りました。「私達の心に憎悪と怒りが押し寄せて来る。しかしそこに心を向けてはいけません。そこに執着することで今以上に苦しむことになるからだ。」その後彼らは犯人の家族のもとに向かい、犯人の奥さんと子どもを哀れんだそうです。そして葬儀の席にその家族を呼び、「一番つらいのは彼らだ」と語ったそうです。そしてお互いに神様の大きな癒しと回復が起こり、その葬儀は、言うまでもなく未だかつてみたくもないような素晴らしいものとなったそうです。憎しみに執着してはいけません。聖書は人を赦し愛するように語られているのです。

■ 執着は道を外す

あなたが執着しているものから離れてください。人は新しく生まれ変わると変わります。人が変わらない理由は、過去の執着です。正しく生きるとは、私たちの心の中にある純粋さを見極めることです。私たちは神様の目線で朽ちないものに目を向けなければなりません。私たちは、目に見えるものに結果を見出そうとしますが、そこで大局を誤ります。大観とは、目に見えないものを見ることで、目に見えないものを誤らない決断です。あなたの生涯に渡るよい決断をしていかなければなりません。罪を理解し、許された者が覆われる恵みを知ってください。命がけであなたのために犠牲になった人がいるからこそ、自らの人生を正しく決断していきましょう。

(要約者:浅野恵子)

(2021年1月10日)